

P-039

療養中の子どもの教育支援に関する多職種連携の現状について

-フォーカスグループインタビューを通じた検討-

宗 皓¹、富崎 悦子²、小澤 典子²、
副島 賢和³、添田 英津子²

¹ 医療法人財団はるたか会 訪問介護ステーションあおぞら京都

² 慶應義塾大学看護医療学部

³ 昭和大学保健医療学部

【背景・目的】

小児医療技術の進歩により、難治性疾患を含めた治癒率は改善しており、特に近年では、自宅や地域社会の中で療養を続けながら生活を営んでいる子どもが増えている。しかし、高度化する医療の中では治療が中心となり、子どもが発達に応じた遊びや教育を受けながら生活する環境としては課題が多い。医療施設と地域の隔たりが無く、子どもらしく過ごせる環境や体制の整備・充実が求められるなか、本研究では、実際に病院内外で子どもに関わる専門職に就く方を対象にグループインタビューを実施し、現状の課題や今後必要な取り組みについて検討することを目的とした。

【方法】

調査および分析はフォーカスグループインタビューの手法によって実施した。データ分析は、対象者の意見を把握しやすく、かつ得られた言語的・非言語的表現についても焦点を当てられる、記述分析法と内容分析法を組み合わせて実施した。

【結果】

インタビューは、看護師、学校教諭、養護教諭、保育士の計8名で実施した。専門職としての経験年数は6～14年、小児科病棟での経験年数は0～5年であった。インタビューでは、特に療養を受ける子どもの学ぶ権利について、病院と地域の多職種連携における課題を中心に、子どもの療養環境の改善に向けた語りを得た。

分析の結果、「支援に対するとらえ方」、「個人の考えによって変わる関わり」、「入院中の教育支援」、「入院中の状況が捉えづらい」、「他職種への意見の言いづらさ」という5つのカテゴリーを抽出した。

【考察】

調査の結果、療養中の子どもの教育支援の課題として、子どもが入院中に、病院と地域の専門職が連携しづらい状況が明らかとなった。また、各専門職によって中心とする支援が異なり、多忙な状況も相まって、病院内でも専門職同士の連携が難しくなっている。入院中の子どもが教育を受ける権利の保障については検討が進みつつあるが、専門職同士のつながり方が分からず、各支援者個人の考えによる支援が中心となっている状況もある。地域でも療養を続ける子どもにとっては、入院治療が必要になっても切れ目のない教育支援を受けることが重要である。そのためには、入院中の教育支援を相談する場の設定や、病院内の状況について共有しやすい状況を作ることが求められている。

P-040

小学校における肢体不自由及び医療的ケアを有する児童の指導・支援に関する研究

-小学校教員のインタビューからの分析-

永谷 智恵¹、中澤 幸子²

¹ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科

² 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

【研究目的】

本研究では、地域の小学校に在籍する肢体不自由及び医療的ケアを有する児童に焦点をあて、支援・指導の経験のある教員を対象にインタビュー調査を実施し、支援・指導の内容、工夫、連携等について考察することを目的とする。

【研究方法】

1. 調査対象：小学校にて肢体不自由及び医療的ケアを有する児童（以後、児童）を担当したことのある教員 2. 調査方法：半構造化によるインタビュー調査 3. 調査期間：令和4年8～10月 4. インタビュー内容 ①児童への指導・支援内容 ②支援・指導の際の工夫・配慮 ③実施されていた連携方法・内容④通常の児童が学ぶ意義 5. 分析方法：インタビュー調査内容を録音し逐語録を作成した。それをもとにコード化し、サブカテゴリー、カテゴリーを作成し分析・考察を行った。 6. 倫理的配慮：研究対象者には、研究の趣旨、協力は自由意志であり途中辞退が可能、プライバシーの保護などについて口頭と文章で説明し同意を得た。なお、本研究は名寄市立大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号：R4-09）。

【結果】

研究協力の承諾が得られた教員は4名(男性2名、女性2名)。指導・支援に関わった年数は、1～15年、平均5.5年である。担当した児童の主たる身体的および医療依存状況は、姿勢の保持困難、車いす移動、人工呼吸器使用、痰の吸引、胃ろうの造設などである。分析の結果、＜サブカテゴリー＞数11、＜カテゴリー＞数3つが抽出された。

児童の指導・支援について＜児童の目標に合わせ、できないことはできるように教材・方法を工夫する＞など【友達と一緒に活動できるように企画】し実施していた。また、生活支援員・看護師とく目標を同じにして、役割を済み分けして関わる＞など【同じ方向を向いて、支援者が連携・共同できる関係性の構築】がなされていた。通常の小学校で児童を受け入れる意義について＜1年生から同じ空間に居るからこそ、違いは普通で当たり前になる＞【時間と空間の共有、違いが「普通」の感覚を生み出す共に育つ環境】であると捉えていた。

【考察】

本研究により、小学校の教員は支援者と目標を同じにして連携できる関係性が構築されており、連携・共同して児童ができないこともできる工夫が行われていた。更に、友達と一緒にいる時間と空間が、障害は「普通」という感覚を生みだしていると捉え、地域の学校で受け入れる意義について明らかにしていた。